



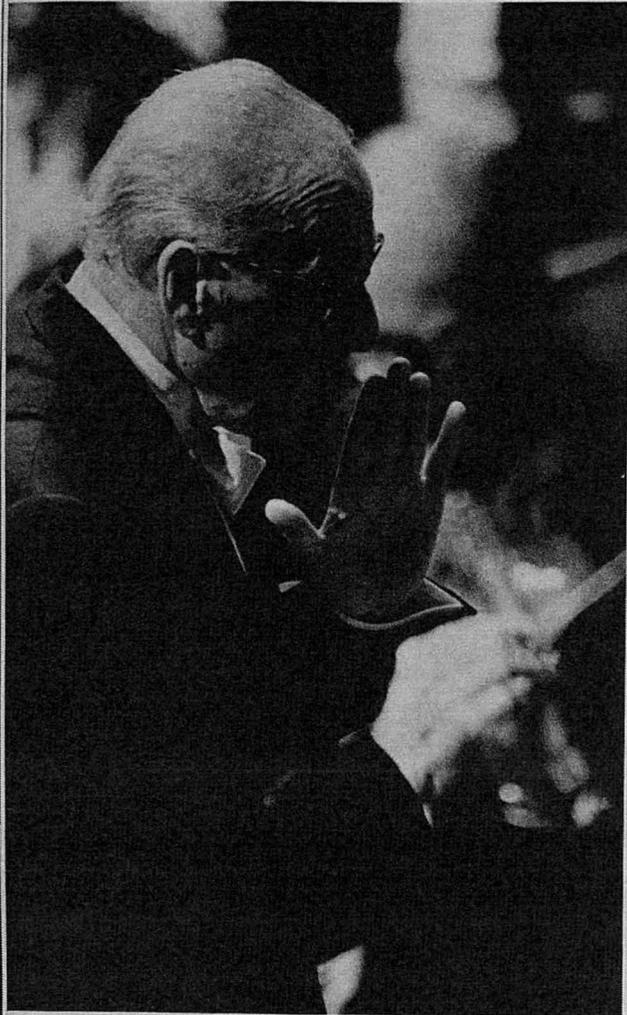
いては、開口一番、非常に違うものだという答えが返ってきた。私が先に述べた録音音楽の時間的逆行性についても先刻承知の様子で、反復鑑賞されることを前提にしているレコードでは、音楽性と同一くくりに技術的完璧さが重要であることを力説した。技術的完全性には、当然テープの編集という問題がからんでいるので、これに話題を進めてみると、生きた音楽を創造するためには最少限にとどめることが必要だという、意外にアカデミックな反応であった。細かい部分どりはできるかぎりさげ、ミスがあったり気に入らないところがたりした場合、その曲なり楽章なりを全部演奏し直すのだそうだ。それによくあれだけの技術的完璧さや、理想的なバランスが得られるものだと感心する。そこが、彼の指揮者としての、信じられないような非凡さなのだろう。



さらに話を、それでは録音音楽が独自の芸術領域を創造できるかという方へ深めた。その答えも実に明快で、可能性は大いにある、とまずいってから、録音技術を使ってまず何をしたいかを考えなけ

ればならない。要するに、自分の創造したい芸術が超現実的なものであるのか、写実的なものであるのかによって、録音技術の用い方はまったく異なってくるからである。いずれにしても、これもすでに私が述べたように、録音音楽が生音楽とは異次元の芸術であるという意識は彼には明確ではなかった。だが例に引いたのは、映画ではなく、写真と絵画であったが、私は大いに感奮し、それは新たな芸術が創造される過程に、ディレクターやエンジニアという録音スタッフが介在する条件について彼の考えをただしてみた。この答えが、また私をなかせたものであった。彼にとってはプロデューサー（ディレクター）が第一、それですべてだというのである。何故なら、録音では、私（ブレーズ）がいくらああしたい（こう翻訳して、エンジニアと一緒に具現してくるプロデューサー）がいなくてもどうにもならないからだとして続け、だからいつも同じ優秀なプロデューサーとしか仕事をしないのだそうだ。彼等とはスコアを読みながら、綿密な打合せをするというそして、結局は彼等しだいで、どんなに良くも、また悪くもなるものだから、と結んだ。ブレーズが信頼おくれたわさるプロデューサー、トーマス・シエバードやポール・マイヤースのなんと幸せなことよ。

セル・クリーヴランド管弦楽団を語る ●インタビュー

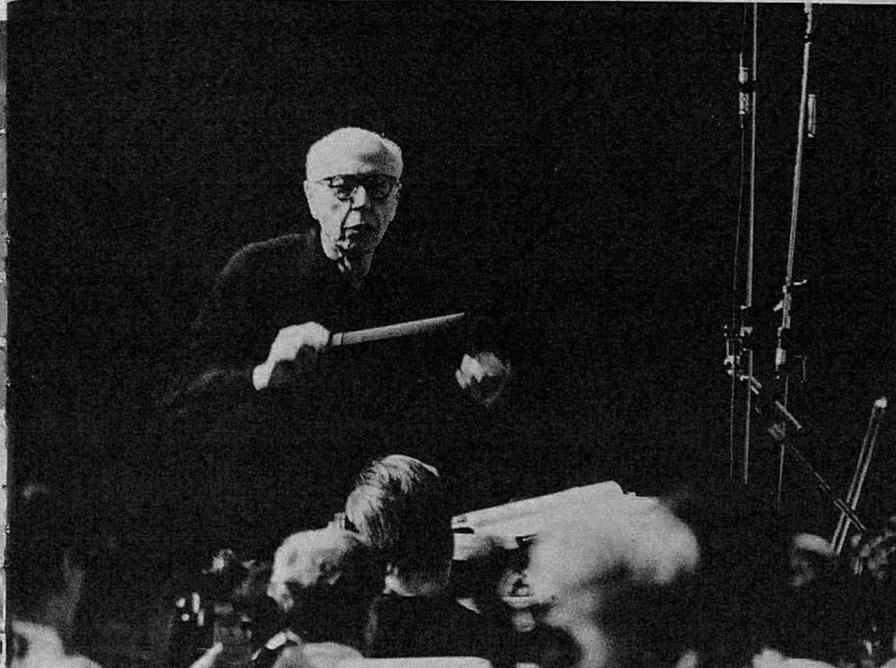


五月の緑が目の下に広がるホテルの一室で、私たちはジョージ・セルに会った。長身をダークスーツについで、紺地に白の小玉のネクタイを締めたセルは、演奏会での厳しい様子とは異なり、眼鏡の奥で柔らかな目が微笑んでいる清潔な老人であった。

わかりやすい英語で、ゆつくりと的確に話すのが、印象的である。まず、大阪と東京の演奏会の成功についてお祝いを述べると、日本の準備がよくて、非常にファンタスティックな音楽会となったといい、聴衆については、ワグナルで、温和しく集中して聴いてくれて、尊敬すべき聴衆だと思えます。そして演奏が終ると熱烈な拍手で答えてくれて、それは演奏家としての生きていく喜びを味わわせてくれるものでした。

大阪での記者会見の際に、クリーヴランド・オーケストラのトレーニング法についての質問に、アソシエイト・コンダクターのルイス・レインが、「二にリズ

資料名：レコード芸術19(7)(235) 1ページ
著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館 2022/9/30



ム、二にリズムム、三にリズムム、四にアーティキュレーション、五にバランス」と答えていた。なるほど、クリウランドの演奏には、二十数年にわたるセルの薫陶がいまわったっている。しかし、それが芸術的なものに向って行く、仕上っていく、もう一つ過程があるのではあるまいか。

「勿論、それは、それだけで終るものではありません。それは芸術的なものをつくり上げる一つの道具と考えられます。結局、私たちは、機械をつくるのではなく、芸術的表現の可能な楽器を目指すのです。付言して言えば、もつとも重要なことは、音の性格ということだと思えます。つまり響きというものは、作曲家のスタイルに一致してはなりません。すなわちモーツァルトならモーツァルトが必要とした響きが、ラヴェルならラヴェルの、チャイコフスキーならチャイコフスキーの、異なった響きがあります。クリウランドの音の性格がどういうものですかとよく聞かれるのですが、その時は、いつも、それは、どんな音楽を演奏するかによって異なると思うと答えることにしています。しかし、どの音楽を演奏するにしても、クリウランドとしての共通の性格はあることでしよう。私は、まずきれいで正確なイントネーション、そして、原則的に室内楽のような緊密なアンサンブルを求めています。よく力まかせにブリリアントな音を出すオーケストラもありますが、私は、お互いのパートが聴きあって、自然で柔軟な演奏をすることを望んでいるのです」

室内楽のようなアンサンブル。それは、既にレコードでもうかがえたところであるが、今度の来演で目のあたり確かめられたことだった。セルは、自分が育て上げたオーケストラが、もつとも自分に合ったオーケストラだと明言するが、しかし、他の良いオーケストラを指揮することも勿論好きだといって「それは、丁度、他のきれいな女の子と遊ぶのもいいという意味です」と冗談をいった。

これまでもいわれてきたことだが、セルの音楽の根底には、ヨーロッパのクラシカルなスタイルが基盤をつくっているようだ。それが、アンサンブルの質としてクリウランドのまた基底にもあるのではないだろうか。

「その通り」と、いい切って、セルはつづけた。「私が試みたことは、アメリカのオーケストラの持つメカニカルな完全な、明澄な音、はつきりしたイントネーションといったものと、旧ヨーロッパのオーケストラの伝統的な温かき、様式に対する知識とを一致させることでした」

一九五七年に最初のヨーロッパ演奏旅行をしてから、六五年のソ連、中欧旅行、六七年のザルツブルク、ルツェルン、エディンバラの音楽祭出演を経てクリウランドの名声は、ヨーロッパでも高くなつていっている。そうした欧州の都市でセルにとつてもつともうれしかったことは「他のどんなアメリカのオーケストラよりもヨーロッパ的なオーケストラ」といわれた時だったという。

話は、レバートリーの問題へと移って



いった。クラシックとロマンとどちらが好きかという問に対して、
「両方とも好きです。いわば七五〇年から一九五〇年の間の作品はみな好きだといつてもいいのですが、もつとも好きだといつたりとくるところは、広義のクラシックからロマンにわたる領域です」別の機会に、その最も得意とするレバートリーを賞した人によれば、彼は「ハイドゥン、モーツァルト、そしてベートーヴェン」といったそうである。セルが古典のスタイルに対して自信をもっているのは疑いない。しかし、古典ばかりではなく、ドヴォルザークなどは、セルリクリーヴ

ランドのレコードのベストを形づくっているし、今回の演奏会では、ウォルトンやシベリウスも入っていた。そうした作品についてはどう考えているのだろうか。「むずかしいですね。しかしいつてみれば、それは個々の作品が好きなので、カテゴリーの問題ではないと思います。よくないドヴォルザークよりは、よいシベリウスの方が好きだといいたいですね。プロコフィエフやヒンデミットですか。ヒンデミットは四〇年来の友人でした。彼のヴィオラ協奏曲などを協演しましたし、プロコフィエフの交響曲の五番は、得意な曲です」

リヒャルト・シュトラウスの影響についてたずねた時、彼は少し夢みるような表情をした。

「二年間、私は彼のアシスタントをつとめました。私が十九歳の時に、ストラスブルクで指揮者となつたのは、彼の推荐によるものでした」

オペラについての意見もきいてみたかった。ビエール・ブレイズは、オーケストラ作品よりはオペラの作品を書くといつたそう。

「二十五年もオペラをやってきました。しかし現在では、オペラをうまくプロデュースすることは困難です。だって、今日では歌い手はリハーサルの舞台上より飛行機で飛び回るのに忙しい有様ですからね」

ピアノとしてのセルの腕前を知らぬファンも少ない。ラファエル・ドレイアンとのモーツァルトのヴァイオリン・ソナタ、ブダベスト弦楽四重奏団とのヒモツァルトのピアノ四重奏曲など、見事な彼のピアノの音がうかがうに十分なものであった。しかし、オーケストラに対しては客観的で厳格に音楽にのぞむよういっている彼が、ピアノリストとしては、どこかいつてみてはいるように思えるのだが：

「そうですか。自分ではわかりませんが、ただ、つまり手というものは非常にダイレクトな表現ができますから、オーケストラの場合のようなマン・トウ・マンの厳しいコントロールを必要とする時に比べて、そのコントロールの度合が少しう

ずれて見えるのではないでしょうか」

ピアノの楽器としての可能性をどう考えますか。

「むずかしい質問ですね。楽器として可能性はもうほとんどないと思います。今後は、公の場でピアノを弾く気はもうありません。私が最後に演奏会でピアノを弾いたのは、一九五七年ザルツブルク音楽祭で、ウィーン・フィルとモーツァルトのト短調の交響曲を指揮して、その後でK四八八のイ長調のピアノ協奏曲を弾いて、最後にモーツァルトのジュピター交響曲を指揮しました。その後は、指揮がいそがしくて、ピアノを練習するひまがないのですよ」

「ピアノを弾きながら指揮をするという事は、バロックのようにコンティヌオとしての場合、小さなアンサンブルで、モーツァルトのトランペットやティンパニの入らない小さな協奏曲の時はいいでしようね」といった後で、ある有名なピアノリストがグリーグとチャイコフスキーの協奏曲を自分で指揮しながら弾いた時は、致命的だったと笑って、そんな場合は別にピアノリストをたてるべきだと付け加えた。

ふたたび話題はクリウランドへと戻つた。クリウランド・オーケストラは、私の楽器だし、私の子供のようなものなのです。アメリカにとまつたわけは、結局、私の理想を実現させるための条件がよかつたらからです。

先のクリウランド・オーケストラの性格に一つ付け加えたいのですが、それは一つ一つのセクシジョンのホモジエニテ



イ(均一性)ということですが。例をホルンにとりますと、私たちは、一人のホルン奏者を採用する時に、一人でいくら上手に吹けても、それだけでは採用しません。ホルン・セクションの他の奏者と合奏をさせてみて、その音色、スタイルが私たちのオーケストラに合うかどうかを試すのです。こうすることによって、セクションごとの均一性を保つのです。だって、ホルンの四重奏の時、三匹のコンカースパニエルと一匹のダックスファントでは困るじゃありませんか。それがチームワークの秘訣でしょうか」

レコーディングをする際、録音と実演とのちがいがいかにどう見ているのかをたずねた。
「その間のちがいは、できるだけ小さくしたいと思いますが、どうしても経済的な制約があるため、短時間で録音してしまわなければなりません。しかし、全体としては、大づかみに演奏をして、部分的なとりなをしします。コマ切れでとるといことは、私たちはしません」

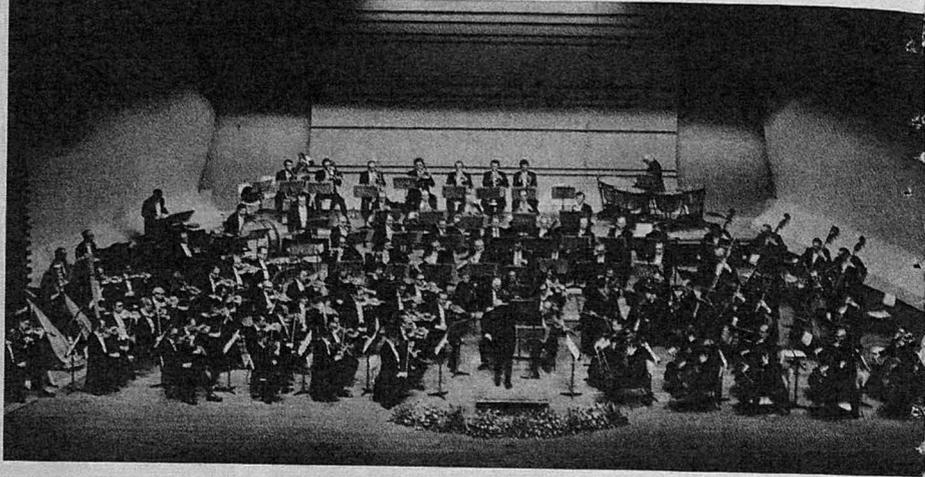
それにしてもセルはクリューヴランドの結びつきは、どうして生じたのだろうか。二十数年前のことを、彼に話してもらった。
「私は、アメリカにきたのはアキシントンなのです。一九三九年、私は二度目のオーストラリア演奏旅行をして、英国に帰る途中戦争の危険を感じたので、アメリカを通って帰ろうと思ったのです。ところが、アメリカに来てみたら戦争が始まったのです。そこでそこに止まることになったのですが、私は、その一年前にNBC交響楽団に客演しなかったというト

スカニーニの誘いをうけていました。しかし、その時はもう一年先の日程まで一杯になっていました。私は、一年後にNBC交響楽団を四週間指揮しました。一九四一年のことでした。それが成功したおかげでホストン、フィラデルフィア、ロスアンゼルスなど一流オーケストラの指揮をたのまれるようになりました。一九四二年からは、メトロポリタン歌劇場の主席指揮者をつとめるようになりましたが、戦争が終って一九四六年に、クリューヴランドからの誘いがあつたのです。私は条件をだしました。それは、クリューヴランドを、文句なしの一流にするための権限と財政を保証するということでした。その条件が入れられたので、私はクリューヴランドに来て、止まったのです」

時間が出て、ブレイズ氏と一緒に写真をとるという本誌の注文に、セルは気軽に電話をとって、フランス語でブレイズを呼び出した。まもなく秀でた額の血色のいいブレイズが、はずむような足どりでやってきて、ビエールに収まっていた。新しい方は、二人の指揮者の存在は、クリューヴランドのメンバーにとっても聴衆にとってもうれしいことにはちがいないだろう。

付記…このインタビューは、丹羽正明氏によるFM東京のインタビュー録音が行なわれた際に、同氏およびFM東京の御好意により同席取材をさせていただきます。感謝するとともに、文責は一切当編集部にあることを明記しておきます。

座談会●エリート・オーケストラの内側



クリューヴランド管弦楽団のメンバーは語る

栗田亮

今月の音楽会の話は何といつても日は月を同じくして来日した世界の二大オーケストラ、ベルリン・フィルとクリューヴランドの競演であつたらう。ベルリン・フィルが最近一段と演奏に変貌を見せているカラヤンのタクトのもとに熱気あふれる演奏をくりひろげ、また一方クリューヴランドはセルと話題の人ブレイズの二人の指揮者のもと完璧なアンサンブルをいかに発揮し、われわれにとって幻のオーケストラと考えられていたこの団体のすべてを示し、聴衆の絶賛の拍手を浴びた。

本誌ではさつそくこの卓越したオーケストラの実体を探るべく座談会を企画したが、なにしろ連日公演というハードスケジュールのため時間的余裕がなく、一時は不可能とあきらめたが、幸いにも東京公演の初日(五月二二日)特に本誌のために時間を割いてくれるという幸運にめぐまれ約一時間三人のメンバーに話っていたのが以下である。

なお出席者はコンサートマスターのグニエル・マジユスケ、首席オーボエ奏者ジョン・マック、在籍四二年のウエテラ

ン第三ヴァイオリンのハイマン・シャ
ンドラーの三氏である。

ワインティシ・ワインの実体

シャンドラーさん、あなたはセル
（楽員たちはドクター・セルとよんでいた）
氏の有名な「百年の治世」を経験された
わけですね。

シャンドラー（以下S）私がこのオー
ケストラに入ったのは一九二七年です。か
らセル博士の来任のずっとその中三年
二年間在籍というわけで、その中三年
間は第二ヴァイオリンの首席をつとめて
きました。セル博士とは来任当初から一
緒に演奏していますが、それは楽しいこ
とがありました。彼は偉大な音楽家で、
指揮者ですから、彼によつてクリューワ
ンドは大きく成長しました。

セル氏来任以前と以後とではどん
な違いがありますか。
S そうですね、オーケストラの合奏
技術が大きく進歩したことでないでし
ようか。

マーティン・メイヤーが「クリ
ウランドは素晴らしい。年代物の芳醇な
銘酒だ。しかし長くは続くべき」とい
ているのですが、どうお考えですか。

ジョー・マック（以下J）ワインティ
シ・ワイン」というのは長年かかって独
特の風味をもったアブドウ酒のことです。か
ら、そういう意味ではまさにその通り
だと思えます。しかし、そういう銘酒の
特質のひとつとしてその風味が非常に長
い間変わらずに続くということがありま
す。

パーンステインを迎えた演奏会のこと
を覚えて銘酒としての特質は薄れはし
ないと私は考えますが……。
タニエル・マジスケ（以下M）ます
ます滋味を増しつつあるんじゃないで
すか。

そうですか。そううかがってたい
へん心強いです。

ところで、セル氏はこれからはも
っと指揮を続けるでしょうが、彼が指揮台に
上がらなくても「銘酒」の風格は変わら
ないかと確信しておられますか。



タニエル・マジスケ

M トスカニニはNBCを十七年
間も指揮したわけですが、NBCのタク
トをはじめ取ったのが実に七十歳の時
だった。そういう例もありませんから、セル
博士との共同作業はこれからずっと続
くことを期待しています。

でも、たとえ彼が引退してもクリュー
ランドはそんなに変わらないでしょう。
というのも彼は、自分が引退した後のこ
ともちゃんと考えて、長期計画でオーケ

ならざるを得ない。

でも自由で自己を表現できるように
なったんではないか、後はほんとうの
愉悦を味わえるではないか。

J オーケストラのように、大勢の人
間が一緒に仕事を一つのものをする
場合、その構成メンバーがどうして
も多種多様にならなければならない。
音楽観、曲に対する解釈も全部違つて
くる。それをまとめて統一性のある優
れた演奏をさせるためには強い人格も
人間が必要だ。練習というプロセスを
経て全員が一つに溶け合う必要もあ
る。

セル氏の猛訓練に長年耐えてきた
あなたが今度迎えた新しい指揮者、
おそろしくエネルギーが強いセル・
ブレイズ氏との未来についてはどうお
考えですか。

M たいへん実り豊かなものだろうと
思います。というのは、ブレイズ氏の
最も関心のある分野はこれまでセル博
士があまり手がなかった畑です。現
代音楽の分野、例えば「春の祭典」の
コードがすばらしくたように立派な成
果をあげていくことができると思いま
す。先ほど「年代物の銘酒」といわれた
けれども、それはけつして閉鎖的な名人芸
であつてはならないわけで、ブレイズ
氏を迎えてわれわれはどんどんプログ
ラムの枠を広げ、新しい面を開拓してい
けると思つてます。

J セル博士がブレイズ氏を客演指
揮者として招へいたのは、私の感じ
は、両者は実によく相補うということ



セル博士

考えてだと思つたのです。
単にブレイズ氏が作曲家・指揮者として
卓越しているというだけでなく、セル
氏とのコントラス、これが実に効果
的ですね。例えば指揮のやり方をとつ
てもブレイズ氏はセル博士ほど細かく
ない。彼の関心はその曲の音楽的な内容
というものがいつい何かという根本的な
問題にもっと深くかかわっているわけ
です。彼の指揮で演奏することも違つ
たファイリングを感じる、気分が一新す
るといふのでしようか。

この、いわば新旧両世界を経験できる
ということはすばらしいことです。
シャンドラーさん、あなたのよう
に長年セル氏のもとで過ごしたあなたが
ブレイズ氏と観いかがですか。

S そうですね。クリューランドはほ
んどあらゆる大指揮者を客演指揮者に
迎えてきました。それそれ優れた特色を
もつていて非常に興味深い体験でした。
しかし何となくセル氏によって形
成されたといつてもよいくらい深い関係
ですから、私たちに可能なものの中からベ

ストラを作り上げてきています。例えば
プログラムのことでも、あまりに偏らな
いように他の傾向の違う指揮者を客演に
迎えて振らしています。

他のオーケストラをいろいろ経験
なさったというのですが、クリューラ
ンドの音楽的な特徴はどのようところ
にあるとお考えですか。

J 他のオーケストラに比べクリュー
ランドの木管はまとまりがないへん洗練
された特徴です。それにたいへん洗練
されています。

もちろん他のオーケストラにもすばら
しい管楽器奏者いますが、しかしこ
ほど足並みがそろつていないでしょう
ことに曲の様式にあった演奏をするとい
うことではクリューランドはまことにす
ばらしい。他のオーケストラは統一性
にや欠けていることが多いし、洗練さ
という点でもクリューランドにひけをと
ることが多いでしょう。

技術のすぐれた管楽器奏者をそろえて
もアンサンブルとしてはバラバラにな
りかねない。そこへいくとクリューラ
ンドは足並みもそろつていて、音楽的にも
同じものを指向している。音色について
も、私がこれまで経験した他のオーケ
ストラよりもムラがないと思います。こ
れは演奏の効果高めるのにたいへん重要
なことです。

M それはとてもむずかしいことだ
が、それをやっているから他では求めら
れない演奏の質が実現できるのだと思
います。
S セル博士は管楽器群をことに高く

ストをひき出すということにかけては、
セル氏ほどの手腕の人はいないのであ
りましょうか。

クリューランドの特質

アメリカのオーケストラは、オー
マンティとフィラデルフィア、セルとあ
なたがたというように一人の常任指揮者
が長い長い間一つのオーケストラと
仕事をすることが多いようですが、何か
原因が考えられますか。

M それはおたがいに満足し幸福であ
るから長続きするのでしよう。

批評家によつては、クリューラ
ンドは他のアメリカのオーケストラに比
べたいへんヨーロッパ的という人がい
ますが、その点はどうですか。

S セル博士は昔の膂までヨーロッパ
的で、訓練の仕方も完全にヨーロッパ
だといえると思います。ヨーロッパの
統にはぐくまれて音楽家となり、ヨー
ロッパで仕事をしていた彼に徹底的に訓練
されたクリューランドの音楽性がヨー
ロッパ的な傾向を帯びてきたのは当然でし
ょう。

M セル博士の要求するものはきわ
めて単純で、まず曲が表現しようとして
いるもの、その内容が何なのかを把握する
こと、そして次にそれを美しく表現しな
ければならないという事です。
たいへん美しい曲のもつては内容
から遠いというふうなことは私たちの場
合考えられない。
この点が他の名人芸を發揮するオーケ
ストラと違つていようか。

評価して、クリューランドの質は
す。人によって「セルの軍隊式レ
ーニングはとてまたまらない」といつて
こぼす人もいますか……。
M いや、それは違つていようか。音楽
に限らないけれど、何であれ思つたよう
に仕事ができるようになるためには、きち
んとした訓練を受けなければいけない。
ある秩序に従つた訓練をつむことによつ
てはじめて自分の考えを表現できるように表
現する自由をもちとることができるとは
ないでしようか。その自由をもちとるた
めの訓練は、どうしてもある程度厳しく

J クリューランドの弦は素晴らしい。
王冠のようだといつてもいいでしょう。
でも管はその王冠に似たる輝きをそえ
る宝石だと思えます。王冠に宝石がつい
ているが、いいかというところが、わ
れわれのオーケストラと他のオーケス
トラとのはっきりした違いでしょう。

トレーニンングについて
人によつては「セルの軍隊式レ
ーニングはとてまたまらない」といつて
こぼす人もいますか……。
M いや、それは違つていようか。音楽
に限らないけれど、何であれ思つたよう
に仕事ができるようになるためには、きち
んとした訓練を受けなければいけない。
ある秩序に従つた訓練をつむことによつ
てはじめて自分の考えを表現できるように表
現する自由をもちとることができるとは
ないでしようか。その自由をもちとるた
めの訓練は、どうしてもある程度厳しく



クリューランド

私はあなたがたの演奏をきいて、
これはいわゆる「ヨーロッパ的」でもな
いし、さらにとニューヨーク・フィルの
ようにアメリカ的でもない、たいへんユ
ーロピクな音楽だと感じたのです……。
J アメリカにももちろん音楽的な伝
統はありますが、それは、ヨーロッパ的
な国民的伝統というものは違つてしま
う。ヨーロッパのオーケストラは、耳の
こえた人なら、ほんの少しきいただけ
でも、ドイツのオーケストラかフランスの
オーケストラかということがききわけら
れる。

例えばフランスでは、イタリアの音楽
家の名前でもフランス式に綴ることが多
いのに、私たちはドイツ人はドイツ語で
表記し、イタリア人はイタリア語で書く。
これはこじつけのような例ですが、とに
かくヨーロッパのオーケストラよりはも
つとコスモポリタンであることは事実で
、そこにアメリカの可能性が潜んでいると
思っています。

これからコミュニケーションの質
量ともに増大していけば、本場に国際的
な時代がやがて到来すると思われま
すが、クリューランドはそういう意味で新しい
時代のオーケストラのあり方を先取りし
ているともいえると思つてます。そうした
特質は、今マックさんがおっしゃったこ
と以外に、どんな要因で形成されたのでし
ょうか。

M それはやはりセル氏に負うところ
が大きくていようか。彼は単なる指揮者で
はなく、楽団員のすべてを統括する地
位にあります。楽団員の選抜に際しても



本誌を手にクリーヴランド管弦楽団の特質を語る三氏

他のオーケストラと違ったユニークな基準で選考し、彼の要求するものを音楽的に満たす、ある意味では技術以外に音楽性の均質さを守るメンバーだけを選びます。

シャンドラーさん、長年の経験からいってこの問題についてどうですか。

S マジスキェさんのいったとおりですね。彼は楽団員の選び方が実に巧妙です。織物をとるようにさまざまな色の糸を選んで、こうした見事なクリーヴランド・オーケストラという織物を織り上げたわけです。

彼はあるプレーヤーが全体の中でどう機能するかということを見抜くのがたいへん巧みです。

演奏家の中にはコンサートのために自己の内面的な欲求と関係なく同じような曲を練習するのはやだという人がいますけれど、どうお考えですか。

J くり返し同じ曲を同じように演奏しようとしてもそれは不可能なことです。ことにオーケストラの場合は、ですから何回同じ曲を演奏してもそれは機械的なくり返しにはならない。いずれもが新しい音楽的な体験になり得ます。

M セル氏のリハーサルは徹底的に目的をもってくり返すのであって、ただのハード・トレーニングではありません。ですからこれに鍛えられると自己のコンディションを整えることにも熟達して、長時間の空の旅の直後でも完璧な演奏ができるようになります。

第一回目の欧州演奏旅行の時クラリネット奏者が具合を悪くしてコンサートの

直前に鼻血を出したんです。それでもコンサートでは好調のときよりよくらいに見事な演奏をした。こういうところが他のオーケストラと比べてクリーヴランドの抜きん出ている点の一つでしょう。

レコーディング

セルとブレイズではレコーディングの方法に違いがありますか。

J 音楽のつくり方には違いがあつてそれぞれ個性的な演奏をしますが、録音のやり方にはあまり違いがない、というより似ているといつてよいでしょう。

S どちらの場合もレコーディングが単なる事務的な処理ではなくて、すぐれた演奏でなければならぬ。ですからレコーディングの前に徹底的に研究し、リハーサルするわけです。

録音の際テープのつぎはぎがよく問題になりませんが。

M 私たちの場合は通して演奏し、いわゆるつぎはぎ細工はほとんどしません。やり損ったらはじめからやり直します。

J 二人とも原則として通して録音しできが悪ければやり直すという方法をとっています。

ルイス・レイン

クリーヴランドのアンシエイト・コンダクター

インタビュー

西村弘治

西村（以下Nと記す）「クリーヴランド管弦楽団はセルとブレイズの指揮ではまったく異った音を出しますね」

レイン（以下Lと記す）「まずレパートリーがちがいます。それにオーケストラの音質は指揮者のジュエスチャーによつてずいぶん変わるのをご存じでしょう。たとえばストコフスキーがクリーヴランドにくると、同じレパートリーをやつてもた



いへん異った音を出すのです。セル氏はオーケストラのクラリティーやアーティキュレーションやレトリックの鋭さに留意します。ブレイズ氏はその上に音楽の異った見解をもっています。ですからドビュッシの『海』をセル氏が指揮するのとブレイズ氏とのでは、オーケストラはまったく異った音を出すのです。N 「それはど機敏に反応するオーケストラをあなた自身が指揮するとき、どう思いますか」

L 「クリーヴランド管弦楽団は偉大な楽器です。私はそれを指揮するのがいつも楽しい。特にソロ奏者たちが傑出してゐるので、指揮者が考えている以上にあるフレイズを美しく演奏したりすることがあります。そのとき指揮者はリハーサルの途中でも、そのフレイズだけでなく関連したところの構想を変えてしまつたりするわけです。これはたいへん挑戦的なオーケストラにちがひなく、指揮者はその上に何かを築き上げることが出来ます」

N 「私は大阪であなたがたのオーケストラのリハーサルを聴いていたのですが、ブレイズの指揮では奏者たちが楽しんでやつていて音が変つていった。セルの指揮では厳しい表情でやつていて、本番とあまり変らないように思いました。L 「彼らがブレイズ氏に敬服していることは確かでしょう。彼らのセル氏とのお付き合いは長いですからねえ（笑）。それはあらゆる点で幸福なものです。彼はセル氏を尊敬していて、どんな指示にも直ちに反応することができます。」

N 「クリーヴランド管弦楽団は一シーズ

ンにどのくらいコンサートをやっていますか」

L 「毎年たいして変わりませんが、昨年は二百九回やりました。セル氏はクリーヴランドでは一シーズンに十二から十三週間、演奏旅行では二から五週間、指揮します。私はクリーヴランドでは四週間、そのほか夏のコンサートや青少年のための「世界的に何回か指揮します」

N 「世界的に何回か指揮します」

問題となつていますが、クリーヴランド管弦楽団はどうですか」

L 「アメリカではインフレーションのためオーケストラを運営する費用がたいへんかさむようになりました。クリーヴランド管弦楽団は一年には四〇〇万ドルかかります。入場料の収入はその四八パーセント、あとは寄付に頼つたりするのですが、今年はクリーヴランド市民の募金運動をやつて一〇〇万ドルほど集めたようなわけで、ますます苦しくなつていくのでしょ。われわれには政府や市の補助はありません」

N 「今度、日本でベルリン・フィルハーモニックとクリーヴランド管弦楽団が連続してコンサートをやつたのですか」

L 「私は大阪でカラヤンとベルリン・フィルハーモニックのリハーサルを聴きました。あ、調子が合つていませんでしたね（笑）。あのオーケストラは一緒に合わせて弾いてはいなかった。私はアメリカやヨーロッパでベルリン・フィルハーモニックを聴きましたが、調子があつたときにこそは素晴らしいです。しかし音が合っていないと、あの弦は美しい」